

『萱草に寄す』の文脈

—「またある夜に」をめぐって—

大森郁之助

立原道造の第一詩集『萱草に寄す』は、そこに収められた各詩篇の構造について、また詩集全体としての構成について、意識的乃至意図的な広い意味の（技巧）性を、しばしば指摘されている。

例えば前者は

- ① 脚韻に似せた、句末音の統一
- ② 同一語の反復使用
- ③ 同一音の多用

等があげられる。即ち①については長谷川泉氏が、『萱草に寄す』収載各篇の Sonnet 形式の、本来の押韻を、

ソネットは、四・四・三・三の計一四行からなる詩形である。そして四句の押韻と、三句の押韻があわせ用いられるのが原則である。

と要約した上で、それと対比して「立原道造のソネットは（略）押韻については厳密ではな」く、「はじめてのものに」を例にとつても「前連、後連の最後の韻が、△降りしきった▽△溢れてゐた▽△いぶかしかった▽△識った▽△というふうに△た▽で統一されているのがめだつだけである。」と限定しながら、

しかし、この△た▽は、立原らしい音楽的效果はあげている。と、それなりの評価を与えている。

同じ詩について田中清光氏も「脚韻まがいの工夫が凝らされ」たものとして注目し、宇都宮万里氏は「またある夜に」を例として、一般に「立原のソネットは、脚韻にさせて同じ響を持った語を句の最後に持つて来るように工夫してある。」ことを指摘し、更に立原の意図を推測して、

脚韻は、時間的な効果の他に空間的な効果即ち、ある構成的な構造を築きあげるといふ効果を有している。立原は、詩を建築とむすびつけようとしたのではないか？と発展させた。

次に②の、各句末尾だけに限らない同一語句の反復頻用については、同じく宇都宮氏が「またある夜に」における

私ら 　あらう 　霧 　に（助詞） 　やうに 　も（助詞）

の各語句を指摘し、③の同一音反復は、田中清光氏が、「はじめてのものに」の中で

灰 　ひとしきり 　ひとと 　光と 　ひびく 　笑ひ声
人の心 　ひとが 　いかな日 　火の山

といった「『ヒ音』のいかにもこまやかな母音 i をたずさえた純粹な

ひびきが、綾のように十四行をかけめぐり、」更にそれが

ささやか かたみ かなしい 明かった 語りあった
窓からは いぶかしかった いかな 初めたか 幾夜さかの「夥しい母音aを含む『カ音』との交錯によってニュアンスをかもし」ている、と評した。

右のような各詩篇内部での語句・音韻配置の工夫とは別に、詩集を構成する際の詩篇の配置についても、各篇が無関係に孤立することなく一つの主題に収斂するように、かつその主題の展開を意識した順序で、並べられている、とされる。例えば河村政敏^(註4)氏は、

「SONATINE No. 1」の五篇の詩の間には、心理的な経過がはっきり認められ、一つの主題が音楽的な情緒によって展開されている。

とし、宇都宮氏は、「(同前) 五篇の詩及び関係深いと思われる詩と物語の成立年月を調べ比較してみると」

詩の題までも彼が物語の展開を意識してつけた事が理解されると論じた。

以上、各詩篇個々の、また詩集全体としての意識的・意図的な構成ということがこの集の根本的な姿勢だとすると、右に指摘された事項以外の面で仮りに難解・不明瞭な表現があっても、それを作者立原の迂闊とか混乱とか考えるのは躊躇されるのではないか。一例をあげれば巻頭第一篇の「はじめてのものに」という表題が、村野四郎^(註5)氏の指摘どおりに

「はじめての人に」の意味であるのか、「はじめての恋に」の意味であるのか、それとも「はじめての疑惑に」であるのか、「はじめての悲哀に」であるのか、

「いたってはつきりしない」としても、だから△不可解▽というわけではなく、

そのいずれであっても、作品の暗喩として通用するといったフレイズである。

つまり、△限定▽困難ということなのである。限定△不能▽と謂ってしまってもよいが、とにかく△何も解されない▽△どんな意味も伝わらない▽表現なのではなく△どの解に絞るべきか、わからない▽△いろいろの意味が伝わる▽のだから、(それが立原の意図したところであり、一つの技巧としてそういう表現を択んだのではないか?)と考えることも可能なはずである。村野氏自らも認めているように「こうした曖昧さは当時の若い抒情詩人たちの流行的なポーズ」だったのなら、尚更のこと、客観的には好ましくない発想姿勢だとしても立原本人としては予想外の結果などではなかったと考える方が、妥当であろう。

II

このような、△『萱草に寄す』に対する場合に適わしい▽理解の姿勢を用意してかかるならば、この詩集で「はじめてのものに」の次に配置された「またある夜に」(初出、昭10・十一月号『四季』)の文脈は、かなり興味深いものがある。

『萱草に寄す』に収められた詩篇の、文脈——語句相互間の文法的な切れ続きという問題では、「のちのおもひに」についての小川和佑氏の検討^(註6)などがある。そして、小川氏の場合は、西脇順三郎の「ギリシャ的抒情詩」や村野四郎の『体操詩集』等「主知派の詩」における「単純で明解な修辭」と比較して、「のちのおもひに」には

文節相互の巧妙な操作があり、このきわめて不安定な語法が、それ故に読者に散文の文体にない詩的感動をもたらしているのである。

と結論する。

しかしながら、文節相互の關係の△不安定▽さという点では、「のちのおもひに」は、「またある夜に」に比べれば段ちがいに明解かつ單純なのではないか。小川氏が実例とした「のちのおもひに」の第一連四行、

夢はいつもかへって行つた 山の麓のさびしい村に

水引草に風が立ち

草ひばりのうたひやまない

しづまりかへつた午さがりの林道を

は、同氏によれば次の個所の文脈が△不安定▽であるという。すなわち、

(イ) △山の麓のさびしい村に▽の詩句は△水引草に▽の詩句に係絡するとともに、△……かへって行つた▽にも倒叙的にかかる詩句であり、さらに△うたひやまない▽にも係絡している。(略)

(ロ) △……林道を▽は△かへって行つた▽にも倒叙になっている。

(ハ) △うたひやまない▽の否定の助動詞△ない▽は本来終止形であるけれども、△午さがり……▽に係絡する連体形であることも可能であるということも文法的に成立する。

右のそれぞれの個所での説明しかたから見ても、その総括評である△不安定▽とは

○或る語句が、他の複数の語句に同時にかかる

即ち、学校文法の用語で云いかえれば

○或る文節又は句の、他の文節又は句に対する修飾關係――

――どの文節又は句にかかるか――

――どんな關係で、かかるか――

が、一種類でなく複数種類であるという事態をさしていると考えられる。

だが、右の三個所には複数の修飾關係が実際に成立しているか？

まず(イ)例について検討すると、「山の麓の……村に」が「水引草に」にかかる、ということとは考えられない。理由は、学校文法の基本的概念規定として「村に」の「に」が連用修飾語を示す格助詞であるから「……村に」は用言(又は用言相当語)を修飾する筈で、名詞「水引草」を修飾することはない――からである。「水引草(に)」に△かかるとは、「……村の」とでも云わねばならない。

又、「村に」と「水引草に」とが、△……村に、――こまかく云えばその中の水引草に▽とでもいったふうな關係だと解するならば、両者は文法的には並立語又は対等の關係とよばれるものであることとなる。その場合の両者の關係は、共に同一語句に(ここでは「風が立ち」に)かかる、という、いわば三角關係なのであって、一方が他方を直接に修飾する關係ではない。「……さびしい村」に「水引草」は存在するのだから前者は後者に△つらなる▽、というのは、いわば事實關係としてのつながりであって、ここで△「不安定」|| 複数の関わり合いがある▽と評されているのは、(そういう事實關係の存する事實を)表現することばがどう繋げられているかという、別の事柄についてである筈だ。

「山の麓の……村に」の二番目の關係として「かへって行つた」にも倒叙(倒置法)的にかかるというのは、文法的には問題のない、妥当な理解といえよう。だが、これを認めると(認めざるを得ないのだが)、三番目の「うたひやまない」にもかかるといふ説明は成立し得ないことになる。というのは、「山の麓の……村に」が倒叙だといふならばそれを通常(正常)の順序に直すと

山の麓のさびしい村に 夢はいつもかへって行つた

となるわけだが、この形では「行つた」で sentence が完結している――従つて「た」は終止形――と見るしかない。共通語的な学校文法の枠内でものを云う限り(それを越えた独自の文法体系に拠つて云う

のならば、まずその体系・理論そのものが説明されねばなるまい)、修飾する・かかるという関係は同一「せんてんす」内の語句の間で成立する。異なる「せんてんす」に属する語句との間に何らかの文法的関連が考えられても、それは(どんな関連であっても)修飾関係とはよばれない。従って「のちのおもひに」の第一連一行目が、通常の順序では

山の麓のさびしい村に夢はいつもかへって行った。

という完結した one sentence になると考える限り、二行目「水引草に」以下は別の「せんてんす」なのであり、第一文中の「……村に」という語句が第二文に属する「うたひやまない」を△修飾する▽ということとはあり得ないのである。

かくて、小川氏が(1)について想定した三種類の修飾関係の中で文法的に承認しうるのは一種類のみとなる。即ち「山の麓のさびしい村に」という句には、修飾関係が複数種類(複数個)成立するという意味での△不安定▽さは決して無く、ただ倒叙という修辭技巧の存在のみが謂えるのである。

次に、(2)の個所はどうか。

小川氏が、「林道を」は「かへって行った」にも倒叙だと云うのは、

○他の或る語句に対しても倒叙だし、「かへって行った」に対しても又倒叙

○他の或る語句に対しては通常の順序でかかり、そのほかに「かへって行った」には倒叙

の、いずれかの意味であろう。とにかく「かへって行った」以外のいずれかの語句にもかかっているものでなければ、「にも」とは云えない筈であろう。しかし実際には、小川氏自らは「かへって行った」以外の該当語句を示して居らず、また小川氏の解説を離れて考えても、「……林道を」によって修飾される(「……林道を」を目的語とする)語句というのは「かへって行った」以外には求められまい。

とすると、「にも」という云い方には深い意味はなく、小川氏は「：林道を」が倒叙だという点のみを以て△不安定▽の例と做したのだろうか？

では最後に(1)の個所について確認しよう。

「うたひやまない」の「ない」は終止・連体両形が同じ形になるから、「ない」という形そのものからは、そこで「せんてんす」が完結している(終止形)のか、それとも下の名詞「午さがり」又は「林道」にかかっている(連体形)のか、判定し難い。しかし今の場合、「うたひやまない」の主語が「草ひばりが」でなくて「草ひばりの」であることは、別の手がかりとなる筈である。

一般に「——の」という形の主語は、その下の述語において文が完結せず更に連体修飾語となって下の名詞に係ってゆく場合に用いられることが承認されている。その一般用法からすれば、ここで

草ひばりの↓うたひやまない^(終止形)

という形とは考えられず、

草ひばりの↓うたひやまない↓^(連体形)(午さがりの)林道を……

としか考えられない。つまり、「ない」が終止形か連体形か、ここで切れるのか続くのかという点は、一見紛らわしいとしても、最終的にはつきり一方に定め得るのである。

以上、小川氏の云う「のちのおもひに」文脈不安定説は洗い直すと根拠薄弱の感があり、一段階下げて文脈上の技巧性という点でも、この一連の中では

○一行目中、「山の麓のさびしい村に」が倒置(「夢は……かへって行った」を修飾)

○二(四)行目「水引草に……林道を」が倒置(同前)の二個所・一種類(共に倒置)にすぎない。

ついでに第二連以下を見ても、そこでも文脈に関して技巧とよび得

るような変化表現は、第三連の

夢は そのさきには もうゆかない

なにもかも 忘れ果てようとおもひ

忘れつくしたことさへ 忘れてしまったときには

の、二・三行目が一行目を修飾しているという倒置法があるのみである。各語句の修飾関係が一種類しか考えられないという意味でいわば単線的な文脈であるばかりか、語序の入れ替えという(技巧)さえ多くはないという点で、単純とも云える文脈なのではないか。

そして、例えばこの「のちのおもひに」の文脈と対比するならば、

「またある夜に」のそれは、あれかこれかと迷わせる複線の難解さ

“不安定” 感の、程度が違うといえよう。

「またある夜に」は、最後の第四連にはとくに文脈上の問題はない。

私らは二たび逢はぬであらう 昔おもふ

月のかがみはあのよるをうつしてゐると

私らはただそれをくりかへすであらう

の一行目後半「昔おもふ」は、その四字だけが一字あけて切り離されていることから見ても、前半「……逢はぬであらう」とは別のせんでんすに属し、次行の「月のかがみ」を修飾しているわけだろうが、これとても特に誤解され易いという程ではあるまい。

問題は第三連以前、とくに一・二連にある。

(1) 私らはたたずむであらう 霧のなかに

(2) 霧は山の沖にながれ 月のおもを

(3) 投箭のやうにかすめ 私らをつつむであらう

(4) 灰の帷のやうに (第一連)

一・二行目の関係は、「霧のなかに、霧は(山の沖に)ながれる」

という云い方はないから「霧のなかに」は二行目「ながれ」にかかるのではなく、倒置で、「……たたずむであらう」を修飾する。通常の順序に直せば

(4') 霧のなかに 私らはたたずむであらう

四行目「灰の帷のやうに」は、これだけで独立した文と見たのでは何が「灰の……やう」な不明、「……やうに」どうするのかも不明で、心象が成立し難い。当然これも倒置で前行の「私らをつつむであらう」を修飾し、主語は二行目の「霧は」と考えられる。書き直せば

(3') 投箭のやうにかすめ 灰の帷のやうに 私らをつつむであらう

である。

第一連の文脈 “技巧” は右の程度であるが、第二連に進むとかなり錯雑してくる。

(5) 私らは別れるであらう 知ることもなしに

(6) 知られることもなく あの出会った

(7) 雲のやうに 私らは忘れるであらう

(8) 水脈のやうに (第二連)

この連は、前引宇都宮氏の指摘にあるように、一行目「私らは……であらう」「……に」、三行目「……のやうに」「私らは……であらう」、四行目「……のやうに」が、それぞれ第一連の相当個所と同型である。そこから、第一連の文脈と第二連の文脈の類似を予想するのは、ごく自然であらう。まず、

(5)の後半「知ることもなしに」は——

「——に」という形が共通する第一連一行目の「霧のなかに」と同じく、倒置で、上の「私らは(別れる)であらう」を修飾することが、予想される。

(6)の「知られることもなく」は——

1 第一連からの類推としては後の語句(意味上、(7)の「忘れるであらう」?)を修飾することが予想される。しかし又、

2 (5)の「知ることもなしに」と対句になっていると思われる点からは、両句が同一語句を修飾しているということも、予想される。その場合、「知ることもなしに」も後句を修飾しているとなると(5)の「……別れるであらう」を修飾する句が無くなり(主語はあるが)、△どのように▽別れるというのかが語られていないことになる。従って両句共、前の(5)「別れるであらう」を修飾している倒置法と見る方が、穏当であろう。

(6)「あの出会った」△(7)「雲のやうに」は——

1 第一連三行目「投箭のやうにかすめ」の修飾関係から類推すれば、下の語句「私らは忘れるであらう」を修飾することが予想される。しかし、

2 「雲のやう」という比喩は、意味上からいって「忘れる」しかたを形容するのに妥当かどうか。全く不当ともいえまいが、例えば本連末行の△「水脈のやうに」——意識の表層から深く隠された地下水に似て▽という比喩よりも、適切、とはいえないだろう。そして(8)「水脈のやうに」は前行(7)「忘れるであらう」を修飾しているとしたか考えられないから、若し「雲のやうに」も並んで「忘れるであらう」を修飾するとしたら、

○△忘れる▽かたについて、内容の異なる二種類の比喩がなされるという、いめえじの錯雑・混乱

○一方、本連初行の(5)△別れる▽かたについては比喩がなされないうという、不均衡

が生ずる。従って、「……雲のやうに」は「水脈のやうに」とは違つて「別れるであらう」を修飾すると見るべきであろう。

(8)「水脈のやうに」は——

倒置で、「忘れるであらう」を修飾。(前述、省略)。

すなわち、第二連は部分的な語句・音韻の配置が第一連と相似するにもかかわらず、そこから想像されるように各語句の関連——文脈も類似している、ということにはなっていない。一・二連共に文脈上の「技巧」としてはいわゆる倒置法のみが存在するが、その倒置された部分を「」でかこみせんてんす末に「」を付して図示すると、その配置が次のように一・二連で異なる。

(第一連)

私らは……であらう↑霧のなかに」

霧は……おもを

投箭のやうにかすめ 私らを……であらう

↑灰の帷のやうに」

(第二連)

私らは……であらう↑知ることもしに

知られることもなく あの出会った

雲のやうに」私らは……であらう

↑水脈のやうに」

ところで、かかる第二連の文脈を正しく即座にとらえることは、容易であるか、それとも困難というべきか。

右に注解した中で(6)「知られることもなく」や(6)「あの出会った」△(7)「雲のやうに」での各1項のような、△第一連からの類推▽を殊更にいざくことがなければ、第二連の文脈それ自体としてはべつだん難解ではないかも知れない。しかし、同じ第二連の中でも一行目の文脈は第一連のそれと同一である。そのことは、二行目以下の文脈も第一連のそれと同じなのではないかという予想を、全く与えずに通る過ぎ得るだろうか? 語句や音の配置の共通が、やはり、それだけにとど

まらなかつたのだ——という確信に、発展しないだろうか？
 読者はこの一行、この一連を、一の文学作品を構成するところの一片として、他の行・他の連と内容は勿論だが表現の上でも有機的に絡み合っているであろう一片として、読むのである。第一連の場合を想い合わせ、(そのために)第二連即自の把握に直入し難くなる——のが、第二連に対する読者の態度として、むしろ、自然かつ正当なのではないか。

Ⅲ

だが、右のような性質の難解さに、立原自身は、いったい気付いていたか、いなかったか。

気付いていなかった、とするには、作者はそのときどきの目前の一行・一連のみにとられて僅か十四行の全体を把握していなかった、——最後まで、全体としてとらえずに終った、と仮定しなければなるまい。勿論この仮定は、少なくとも詩作における極端な意識家立原については、かなり滑稽であろう。

それでは、気付いてはいたがそれは偶々生じた結果がそうだったことを識っていたという意味であり、意識してそのように仕立てたわけではなかった——と考えるのは、どうか。偶々生じた、というのは、積極的な効果は予定していなかったということである。しかし一方で率直な理解が妨げられるという明白なまいたす面は認識されていたと考えるのだから、結局、好ましくはないが止むを得ず黙過したと見ることになる。だが立原が、とくに処女出版に際して、そのように投げやりな——少なくとも瑕瑾(?)はゆるすという態度をとったと、考える根拠はない。さまざま傍証・心証の指し示す方向はむしろその逆の筈である。とすればここでも又、文脈把握に際しての困惑感に、じつは或る効果が意図されているといったことは無かつたらう

か？想像しやすいのは、文脈の不安定感によって、いまだ截然と整理されたものになっていず微妙に揺曳している心情を予感させる、といった効果であろうか。

本篇の第一連は若干の技巧はあってもべつだん錯雑してはいず、勿論混乱感などはない。そうした第一連との間で韻をふもうとしているかのような第二連は、その限りでは、むしろ十分に計算され整頓された構成という印象を与えよう。感情のおもむくままに脈絡も考えず語句をつらねた、という感じではあるまい。しかしその反面、(韻を合わせようとした)第一連に文脈も合わせてあるだろうという極く自然な予想ははつきりと裏切られる。そのとき、裏切られた読者は、自分の先走りや嘔うだけだろうか。それもあろうが同時に、本来は自分の予想通り合わせてあるべきものを合わせてない、詩人の側の整合不全といった感想をも、内々にはいだくのではないか。

だが、詩人もともと整合に意を用いていたのだという事実を読者がここで度忘れしなければ、右の感想は、詩人が文脈を整合しなかったのではなくして得なかつた、何らかの原因の推測へと発展するだろう。第一連の外形との対応ということも第二連自体の枠・秩序と見なせば、第二連が対象とした心情はその枠にはめ難い、秩序立て難いものだったのでないか。極端にいえば混乱したままの心情ということである。

だがそれは、完全な混乱、真の混乱ではあるまい。第二連自体の△枠▽を意識するから混乱とも感じられるのだが、その△枠▽が元来意識的に仕立てられたものなのである。そしてくどいようだが△枠▽を振り払って読むならば(結局そうすることになるが)それ程理解困難の文脈でもなく、把握困難の心情というわけでもないのだ。

いわば、混乱の印象をふと与えるべく、巧まれた枠であり巧まれた構成、というべきであろう。

そしてその結果、というよりも効果として、それ自体は何の奇もない表現である第三・四連までも、右のような第二連に引き続くゆえに同じく論理立て概念化し難い態の微妙な心情が存することを予想され、そのように受けとられることに成るのではないか。

そして右の△錯雑。微妙な心情▽の予想△という効果は、「またある夜に」一篇の内部のみにとどまるまい。「またある夜に」がこの詩集全十篇中の第二篇だということは、ここで意味をもってくる。「またある夜に」の内では、(混乱)が前半において印象づけられたゆえに、その印象から生ずる効果は後半三・四連という必ずしも狭くはない範囲で発揮され得た。『萱草に寄す』全体として見ればそれは巻頭第二篇で印象づけられたゆえに、後続八篇という、集の大部分に効果を及ぼし得るのではないか。

溯って見れば巻頭第一篇の「はじめてのものに」でも、

○「はじめてのもの」の意味が、限定困難。(村野氏説、前述)

○第一連二行目「この村に ひとしきり」は

「二行目「灰を降らした」を修飾(倒置)

「四行目「降りしきった」を修飾

の、どちらも、語の意味からは可能。

○第三連三行目は

把へようとするのだらうか(と(思ひ)、) 何かいぶかしかった

と補なわないと文法的に繋がらない。

といった、文脈上の不明瞭乃至不備がある。いわば、次の「またある夜に」で決定的に印象づけられる要素が、既に、わずかには存在しているのである。

しかし、云いかえれば、それは存在はしているが未だ甚だ微弱であ

る。最大乃至代表的な印象には到っていない。そんなところもある、という、感じの一つにとどまっているだろう。決定的になるのは「またある夜に」に到ってである。しかし又、それは読者にとって「またある夜に」で突然与えられる印象ということにはならず、集の冒頭から薄々は感じられていたことになるのだ。

即ち巻頭第二篇という位置は、後続八篇という広い範囲に亘って読者の受容姿勢を誘導し得ると共に、それを冒頭篇からの続きとして或る程度段階的に——比較的自然に、なし得る、という、二面の適切。有効さを持っているといえよう。

そしてこの点も又、恐らく偶然の結果ではなかったであろう。

注 1 昭43・五月、明治書院刊『現代詩の鑑賞』3収、「立原道造」

2 昭40・六月、麦書房刊『改版 立原道造の生涯と作品』

3 『解釈』昭36・八月号収、「立原道造のソネットの韻律」1

4 昭44・一月、角川書店刊『現代詩鑑賞講座』10収、「立原道造」

5 昭41・十月、筑摩書房刊『鑑賞現代詩』Ⅱ収、「立原道造」

6 昭47・五月、五月書房刊『立原道造論』